

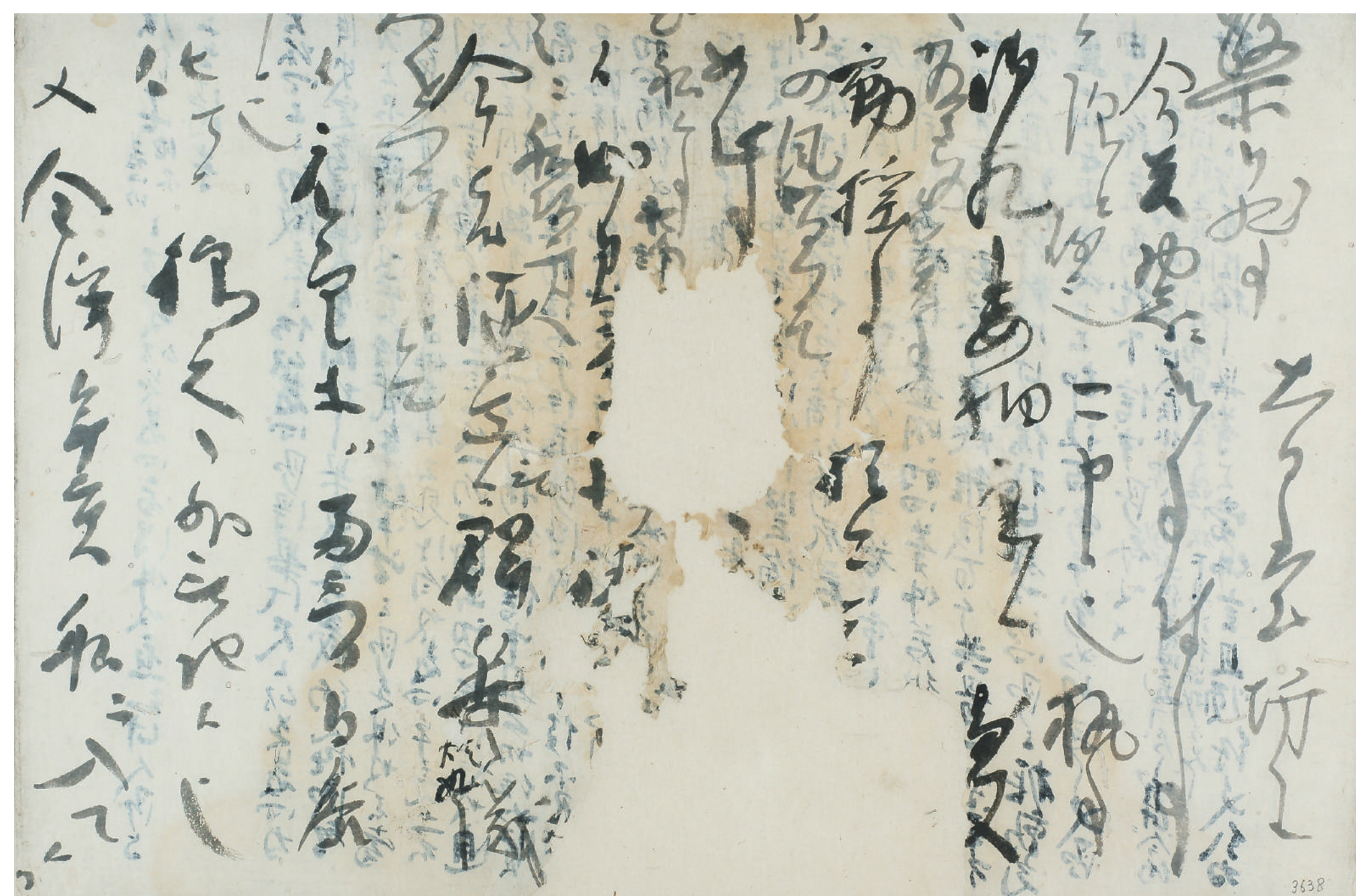
## 千葉氏の権力基盤、千葉湊を管理した寺院

こうみょういん

光明院は真言宗の寺院で、18世紀中頃まで神明町にありました。

古来、千葉は水陸交通が結びつく要衝の地でした。大治元年(1126)に千葉氏が大椎(緑区)から千葉に本拠を移した理由の一つに、地の利があります。

とりわけ結城浦(中世まで都川の河口付近にあった入江)を利用した千葉湊は、中世都市千葉の海の窓口で、水運を介して武家の都鎌倉と経済的なつながりを持つ海の領主・千葉氏にとって、権力基盤となる大変重要な施設でした。



「恵鋌(えげん)書状」(金沢文庫文書)

年貢が千葉湊から鎌倉方面に船で運ばれたことが記されています。光明院には年貢の運搬を取り仕切るため派遣された僧が滞在していました。



15世紀中頃の千葉湊周辺図

南北朝時代の記録に、房総の年貢を鎌倉方面へ海上輸送する際に、光明院が重要な役割を果たしたことが書かれています。光明院が千葉湊を管理し、神明神社が航海の安全を祈願するなど、両者が一体でみなとの運営と水運に深く関わっていたと考えられます※。

江戸時代には、千葉湊に代わって寒川湊が、当時千葉を治めていた佐倉藩の年貢などを江戸に運ぶ機能を担うことで発展しました。寒川に町場が作られると、光明院は現在地に移されたと考えられています。

※光明院は、神明神社の別当寺(神道と仏教を同一視する神仏習合に基づき神社を管理した寺院)